弾ける笑顔へ 寄り添う6団体

読売福祉文化賞

新しい時代にふさわしい福祉活動を実践している団体や個人を顕彰する「読売福祉文化賞」の受賞団体が決まった。18回目を迎える今年は、一般部門で不妊に悩む人たちに経験者が寄り添い、支援してきた「NPO法人Fine」（東京都江東区）など3団体、高齢者福祉部門で認知症への対処法を専門家による講義と寸劇で伝える「じゅんちゃん一座」（青森県十和田市）など3団体が選ばれた。受賞団体には活動賞金として100万円が贈られる。各地域で福祉の向上に取り組む各団体の活動を紹介する。

【選考委員】
安藤雄太 東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー
栗原小巻 女優
袖井孝子 シニア社会学会会長
高木憲司 和洋女子大学准教授
馬場 清 東京おもちゃ美術館副館長
保高充昭 読売新聞東京本社編集委員

主催 読売新聞社
読売光と愛の事業団
後援 厚生労働省
日本福祉文化学会

一般部門

NPO法人 Fine　東京都江東区

イベント開催に向けて準備する松本さん

不妊への理解 支え広げ

不妊に悩む人に経験者が寄り添い、支える活動に取り組む。理事長を務める松本亜樹子さんも不妊治療を経験したひとりだ。活動の原点は、約20年前に自身が治療を受けていた際、患者が集うインターネット上の掲示板に出会ったことだ。

治療を受ける人たちは、肉体的な負担だけでなく、子どもができない焦りを抱えたり、周囲の目を気にしたりして孤立感を深め、精神的に追い詰められること も多いという。費用面や、治療と仕事との板挟み――。互いの悩みを共有できた時に心が救われた。24時間、子供会や学校、幼稚園、病院などで人形劇の公演活動をしてきた。

1996年、旧愛知県立港養護学校の生徒5人が人形劇を始めたのがきっかけ。その後法人の一部門となったが、人形製作や演技指導の支援をプロに受ける など活動は本格的だ。24年間での公演は250回を超え、2000年のフランス国際人形劇フェスティバルに参加、13年には「24時間テレビ」でも紹介された。

昨年2月からメンバーに加わった加藤誠さん(49)は「人形を操っていると、まるで自分が自由に動いているみたい」とほほ笑む。公演後、「失敗を気にせず挑戦する姿に感動した」「自分も頑張ろう」などといった感想が届くという。スタッフで取りまとめ役の介護福祉士石川裕右さん(41)は「地域の住民と触れ合うことで障害者への偏見や差別も取り除ければ」と話す。

新型コロナウイルスの影響で、今年2月を最後に公演活動が休止になった。しかし、新作の練習に励んだり、リモート公演の準備を進めたりして、新たな活動を模索している。

（中部支社・原田展）

認定NPO法人 愛実の会 人形劇団紙風船　名古屋市港区

インターネット配信用にせりふの収録をするメンバーら

偏見・差別取り除く公演

重度の障害を持つ車いす利用者のメンバー13人が、サポートのスタッフや人形劇を始めたのがきっかけ。その後法人の一部門となったが、人形製作や演技指導の支援をプロに受ける など活動は本格的だ。24年間での公演は250回を超え、2000年のフランス国際人形劇フェスティバルに参加、13年には「24時間テレビ」でも紹介された。

昨年2月からメンバーに加わった加藤誠さん(49)は「人形を操っていると、まるで自分が自由に動いているみたい」とほほ笑む。公演後、「失敗を気にせず挑戦する姿に感動した」「自分も頑張ろう」などといった感想が届くという。スタッフで取りまとめ役の介護福祉士石川裕右さん(41)は「地域の住民と触れ合うことで障害者への偏見や差別も取り除ければ」と話す。

新型コロナウイルスの影響で、今年2月を最後に公演活動が休止になった。しかし、新作の練習に励んだり、リモート公演の準備を進めたりして、新たな活動を模索している。

（中部支社・原田展）

認定NPO法人 プール・ボランティア　大阪市中央区

障害者とプールに入るボランティア（大阪市東成区で）

誰もが楽しめる水泳へ

障害者が一般の市民プールでボランティアからマンツーマンで泳ぎ方を教えてもらえる活動を21年間続けてきた。「水泳教室」は大阪を中心に近畿圏のどこかのプールでほぼ毎日開かれ、参加する障害者は年間延べ約4000人に上る。

活動を始めた当初は、障害者専用プールを勧められるのが普通だったが、「誰でも気軽に水泳を楽しめる社会にしたい」と市民プールにこだわり、管理者らと粘り強く交渉を続けた。やがて一般の利用者からも「うまくなったね」と声をかけてもらえることが増えた。

どんな障害があってもプール遊びを楽しめるよう専用の浮き具や車いすも自己開発。はしゃぐ子どもたちの姿にボランティアの間にも笑顔が広がる。「障害に関係なく『水泳好き』としてつながれる」と理事長の岡崎寛さん(64)は話す。

新型コロナウイルスの影響で活動は3か月の休止を余儀なくされ、「体力が落ちた、食べ物がのみ込みづらくなった」などの声も聞かれた。「プールは生きる力でもあると実感した」と事務局長の織田智子さん(56)。コロナ禍でボランティアの確保も簡単ではないが、来年は関東での活動を実現するつもりだ。

（大阪社会部・中田智香子）

高齢者福祉部門

じゅんちゃん一座　青森県十和田市

ユーモアを交えて寸劇を披露する座員たち（岩手県岸野町で）

寸劇通し認知症伝える

認知症患者と家族の日常を、方言とおどけたしぐさの寸劇で披露する。認知症の知識、適切な対応を笑いながら学べると評判を呼び、請われての上演は県内外で200回に達した。

11月10日の公演は、3密対策をしたうえで、いつものように認知症セミナーとセットで行われた。

座長の竹内孝子・十和田市立中央病院メンタルヘルス科診療部長(55)による講義後、アルツハイマー型認知症のしゅうとめが財布の場所を忘れて嫁が取ったと妄想する内容の寸劇を披露。家族のいがみ合いへと発展するパターンと適切な対応で円満な結果に落ち着く2パターンを紹介する と、客席には何度も笑い声が響いた。

竹内さんは、「視覚と笑いが記憶に残りやすい寸劇を通し、円満な解決を導く手法を知ってもらいたい」と話す。

2011年12月に旗揚げした。ケアマネジャー、保健師、医師ら11人が座員で、俳優、介護うつ、若年性認知症など身近な実例を寸劇に仕立て、現在は8演目をレパートリーにする。

竹内さんは「9年間の頑張りの"褒美"と、受賞を喜ぶ。「笑顔の循環」を掲げ、深刻な状況も明るく皆で乗り越えようと意気込む。（青森支局・神秀穂）

NPO法人 居場所創造プロジェクト　岩手県大船渡市

健康サロンで指先の運動をする住民

被災地 役割見つけ活動

東日本大震災で被災した大船渡市末崎町で、交流施設「居場所ハウス」を開設し、高齢化が進む地域の活性化に取り組んできた。

地元住民らで運営し、健康サロンや手芸教室を開くなど、住民が親交を深められる「居場所」づくりに励む。一帯は津波で商店や飲食店が流され、公共交通機関もゆるく、「買い物弱者」も多い。そこで、朝市の定期開催や買い物の送迎・代行など、住民の生活基盤も支えている。

震災後、多数の住民が仮設住宅への入居を余儀なくされ、コミュニティーの再生が課題になった。米国の非営利団体の支援などを受け、2013年に法人を設立。理事長を務める鈴木車利平さん(75)は「高齢者が地域の中で、自分たちの役割を見つけることが大切」と語る。干し柿の生産やツバキ油の原料となるツバキの種の採集など、高齢者が主体の活動も多い。

コロナ禍で活動の一部が制限されたが、自宅に引きこもりがちな高齢者の見守りも兼ねた弁当配達を始めるなど、新たな取り組みも打ち出す。鈴木さんは「これからも住民が健康で楽しく過ごしていけるように頑張りたい」と張り切っている。

（盛岡支局・西村魁）

平戸平和台地区地域運営協議会　横浜市戸塚区

おそろいのバンダナとエプロンをつけてビーフシチューを食べるお年寄り

空き家活用 世代間交流

空き家を活用した「地域交流拠点」にこにこハウス」で、子どもから高齢者まで幅広い世代間交流に励んでいる。代表の望月信さん(76)は受賞に対し、「うれしさと驚きが半々です」とはにかむ。

施設名の由来は、かつて地域の人々が語り場としていた雑貨屋「にこにこ屋」。2011年に閉店した同店に代わる憩いの場を目指し、17年11月、旧当たりの良い畳部屋や広い台所がある空き家を借りてオープンした。

ランチや手芸を楽しむ「にこにこサロン」では、訪れた人がそれぞれの得意分野を生かし、料理や片付けなどを分担する。男性利用者を増やすために始めた「育の日サロン」は、多い時で約40人が集まり、お酒を片手に語り合う。

新型コロナウイルスの影響で3月から約3か月間活動を休止したが、再開後は「他に行く所がない」という親子や、「誰かとお話がしたい」という一人暮らしの高齢者らが久々の交流を楽しんだ。

今後の目標は、より幅広い地域の人に訪れてもらうこと。望月さんは「活動を始めてまだ日が浅いので、もっと発展していきたい」と意気込んでいる。

（横浜支局・中山知香）